

# 保存担当学芸員研修の11年

三浦 定俊・佐野 千絵

## 1. はじめに

保存科学部では昭和59年度(1984年)から、博物館・美術館等で資料の保存を担当している学芸員を対象に、保存科学に関する2週間の研修を行っている。毎回の参加者の数は20名余と決して多い数ではないが、今年度で研修は既に11回を越え、これまでの研修修了数もほぼ200人におよぶ。

ここでは保存担当学芸員研修について簡単に説明すると共に、これまでの研修の変遷について振り返り、今後について考えてみたい。

## 2. 研修の概要

### 2-1. 趣旨

なぜこの研修が始まったか、第1回の研修を開催するときの趣旨説明に簡潔に述べられている。

「近年、地方においては、博物館・美術館等の数が増加すると共にその施設が近代化し、くん蒸室、保存科学室、修復室等の保存に関する部門や施設設備が整備されて、学芸員の内からこれら保存部門を担当する職員が配置されてきている。しかしそれらの職員が保存科学、技術の知識を習得しようとしても適切な学習の場や教材がないのが実情である。そのため博物館・美術館等の学芸員で保存を担当する者に対して、文化財の科学的保存に関する基礎的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし研修会を開催する。」

### 2-2. 対象者

上記の趣旨で始められた研修会であるので、研修への応募者が定員を越えた場合には、次の条件にかなう者が原則として優先される。

- ①資料の保存を担当する常勤の者
- ②文化財の展示収蔵施設に勤務する学芸員
- ③既に開館した施設に勤務する者
- ④ある程度実務経験のある若手の者
- ⑤本研修を一度も受けたことがない者

この他、全体の応募状況を見ながら、地域や館の種別が片寄らないように考慮して、研修生を選考している。

### 2-3. 応募方法

研修生の募集は各都道府県の教育委員会を通じて行われる。応募要項は毎年、研修を開催する年の2月頃に教育委員会に東京国立文化財研究所から送付される。教育委員会からの知らせを受けた館は、要項に添付された応募用紙に記入し、教育委員会を通して〆切までに東京国立文化財研究所へ申し込む。東京国立文化財研究所は〆切後、応募者総数が定員を越えていた場合は受講者を選考し、採否の結果を教育委員会に通知する。

このように応募手続きは原則として各教育委員会を通して行う。しかし、館によっては募集の連絡が期日までに届かないことがあり、当研究所庶務課に直接募集の問い合わせをして、教育委員会を通じて応募した例もある。

## 2-4. 時期

第1回研修は12月はじめに実施されたが、その後はほぼ毎年、7月第3週から4週にかけて、2週間の日程で実施している。講師は原則的に東京国立文化財研究所の職員がつとめる。現在では月曜日から金曜日まで合計10日間、その間毎日朝10時から夕方5時までぎっしりと講義と実習があるので、日頃自然科学に縁のない仕事をしている研修生にはつらいようであるが、研修生にはただ座って講義を聞くだけでなく、現場でそれぞれの抱えている問題をいつでも積極的に質問するように勧めている。平成6年度の時間割を表1に示す。詳しい内容は次の章で説明する。

表1. 平成6年度保存担当学芸員研修時間割

	10:00	11:00	11:15	12:15	13:30	14:30	14:45	15:45	16:00	17:00	17:30~
7月18日(月)	開講式 オリエンテーション		保存環境 総論 —文化財の保存と環境—		保存環境 <実習> —温湿度測定機器の取扱い—					懇親会	
19日(火)	保存環境 各論 —温湿度—		保存環境 各論 —展示梱包ケースの 湿度調節—		保存環境 <実習> —湿度の制御法—						
20日(水)	保存環境 各論 —大気汚染とその影響—		保存環境 各論 —室内汚染—		保存環境 <実習> —室内汚染の調査法—						
21日(木)	保存環境 各論 —光と劣化—		保存環境 各論 —照度基準—		保存環境 <実習> —照度の測定と調節—						
22日(金)	生物被害 虫 —害虫の生態と被害—		生物被害 カビ —要因とメカニズム—		劣化と保存 各論 —紙—		劣化と保存 各論 —絵画の彩色層—		保存環境 <実習> —環境調査1—		
25日(月)	劣化と保存 各論 —木—		劣化と保存 各論 —石—		劣化と保存 各論 —ガラス—		劣化と保存 各論 —考古遺物—		保存環境 <実習> —環境調査2—		
26日(火)	劣化と保存 各論 —油彩画—		劣化と保存 各論 —漆—		劣化と保存 各論 —金属1—		劣化と保存 各論 —金属2—		保存環境 <実習> —環境調査3—		
27日(水)	調査手法 各論 —化学分析—		調査手法 各論 —画像計測—		修復材料 各論 —伝統材料—		修復材料 各論 —合成樹脂—		保存環境 <実習> —環境調査4—		
28日(木)	ケーススタディ —博物館における収蔵・展示の問題とその対策— —美術館における収蔵・展示の問題とその対策—										
29日(金)	文化財科学の動向 —現状と歴史—		閉講式								

## 3. 研修カリキュラムの変遷

昭和59年(1984年)12月3日~15日に実施された第1回研修と、平成6年(1994年)7月18日~29日に実施された第11回研修のカリキュラムを比較したものが表2である。全体を概説、各論、実習に分けて、類似の講義や実習を対比させ、違いが分かるように整理した。

表2. 第1回と第11回の研修内容の比較

第1回研修	第11回研修
[概説]	[概説]
1. 人文科学と自然科学	1. 文化財科学の動向
2. 海外博物館における保存の動向	2. 保存環境総論—文化財の保存と環境—
3. 保存科学概論	
4. 環境概論	
5. 材質劣化概論	
6. 分析化学概論	
7. 保存修復概論	
[各論]	[各論]
1. 温湿度測定と機器	1. 保存環境各論—温湿度—
2. 文化財の照明	2. 同 —展示・梱包ケースの湿度調節—
3. 展示環境調査1—空調器とフィルター—	3. 同 —光と劣化—
4. 展示環境調査2—汚染因子—	4. 同 —照度基準—
5. 文化財の生物劣化—虫被害—	5. 同 —大気汚染とその影響—
6. 文化財の有機化学—漆・膠—	6. 同 —室内汚染—
	7. 生物被害 —虫—
	8. 同 —カビ—
	9. 劣化と保存 —漆—
	10. 同 —木—
	11. 同 —石—
	12. 同 —ガラス—
	13. 同 —油彩画—
	14. 同 —金属—
	15. 同 —考古遺物—
	16. 同 —紙—
	17. 同 —東洋絵画の彩色法—
	18. 修復材料 —伝統材料—
	19. 同 —合成樹脂—
	20. 調査手法 —画像計測—
	21. 同 —化学分析—
[実習]	
1. 温湿度測定法と機器補正	1. 温湿度測定機器の取扱い
2. 展示環境1 (空調)	2. 湿度の制御法
3. 展示環境2 (汚染因子)	3. 室内汚染の調査法
4. 光源の扱い	4. 照度の測定と調節
5. 生物 (カビ)	
6. 生物 (虫)	
7. X線撮影	
8. 赤外線・紫外線撮影	
9. 合成樹脂	
10. 表具	
	5. 保存環境調査
	6. ケーススタディ

両者を比較すると、概説が少なくなつて、各論が多くなつたことがわかる。また実習が全般的なものから、保存環境に絞られてきたこともわかる。全体の11年間の流れを見ても、はじめの内は保存環境から化学分析などの調査手法、修復技術まで含んだ範囲の広い研修内容であったが、数を重ねてほしいに文化財の劣化と保存環境を中心とした内容に整理された。その理由は、2週間という制限の中にすべてを研修に盛り込むのは難しいので、本来の趣旨に立ち戻って実施しようとしたことと、毎年の研修生から保存環境について具体的なことをもっと詳しく知りたいという意見が多かつたためである。また文化財施設の収蔵展示環境を担当しているわれわれとしても、ぜひ現場の学芸員に正確な知識を研修期間中に身につけて、館に帰ってほしいという願いがあつた。

第11回の実習にある「ケーススタディ」とは、実際の博物館や美術館に1日出かけて展示収蔵施設を調査する実習で、平成5年度から始めた新しい試みである。研修成果を現場に生かすための仕上げのトレーニングといえる。研修の最初に、所属する館の資料や施設の規模などに従い、研修生を5～6人ずつのグループに分ける。見学予定施設のパンフレットを参考に、それぞれのグループで知恵を寄せ合いながら、保存環境調査のためのチェックシートをあらかじめ作成する。このための準備の時間が「保存環境実習 環境調査1～4」である。見学先は、研修参加者の所属する館で、東京近辺の施設に協力してもらっている。

ケーススタディは研修の総まとめとして第2週目の木曜日に実施される。当日は全員で館に出かけ、概要説明を受けた上で、展示室や収蔵庫などの施設を調査し、調査後、館の担当者も含めて討議を行う。ケーススタディを成功させるには、研修生、受け入れる館、われわれ担当者の全員の十分な準備が必要でなかなか大変だが、教わつた知識を机上のものとしなないために、大きな意味を持っている。

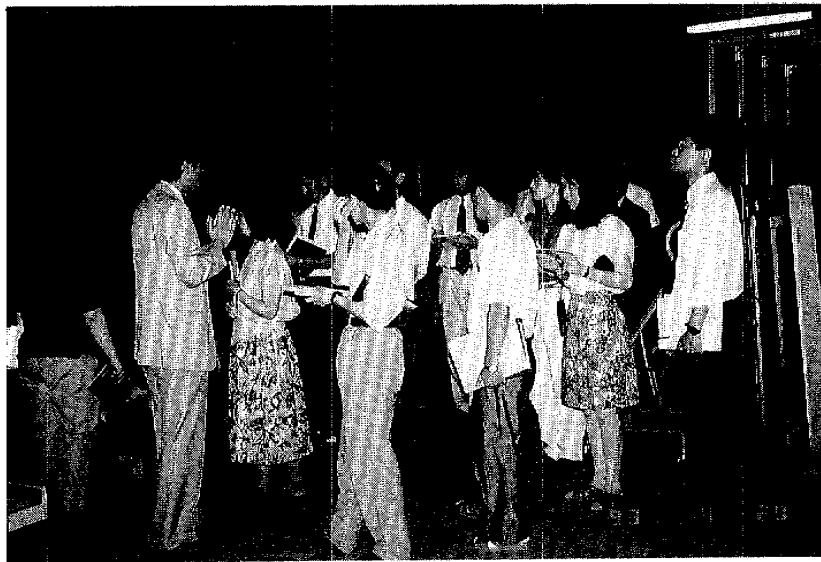


写真1. 千葉県立美術館におけるケーススタディ (1993年7月29日)

現在の研修内容はまだ決して最善のものであるとはいえないが、保存環境と材質の劣化を中心に講義と実習を行い、最後にケーススタディで研修の成果を確認するというスタイルが、11年を経てようやく作られたといえる。

### 4. 研修生の分布

第11回目までの研修生は、たまたま期間中、東京国立文化財研究所に研修にきていて受講した外国からの参加者なども含めて、196名（博物館保存科学研究会〈後出〉調べによる）である。その分布を都道府県別（図1）、地域別（図2）、所属機関別（図3）、館種別（図4）にまとめてみた。

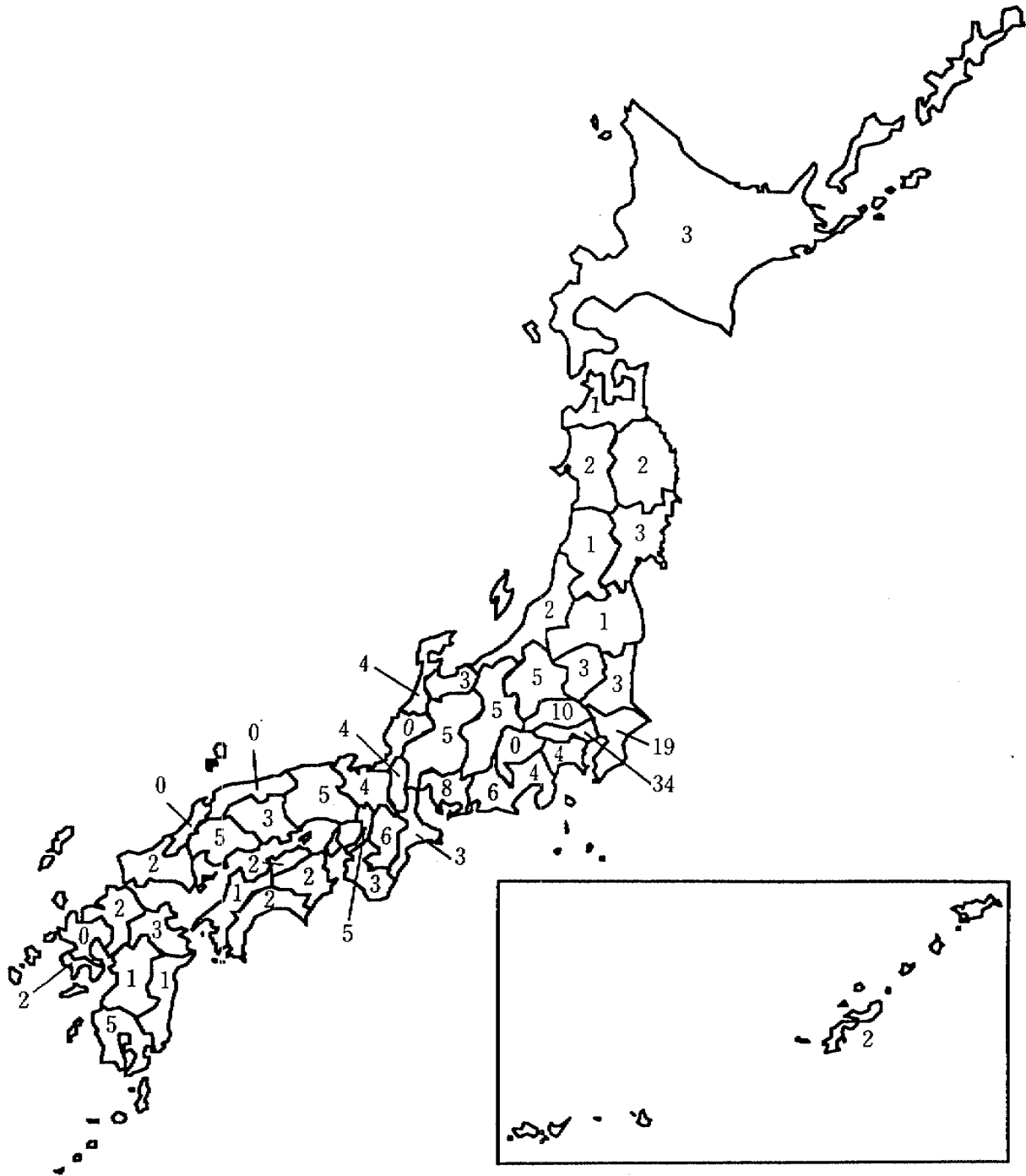


図1. 研修生の都道府県別分布（単位 人）

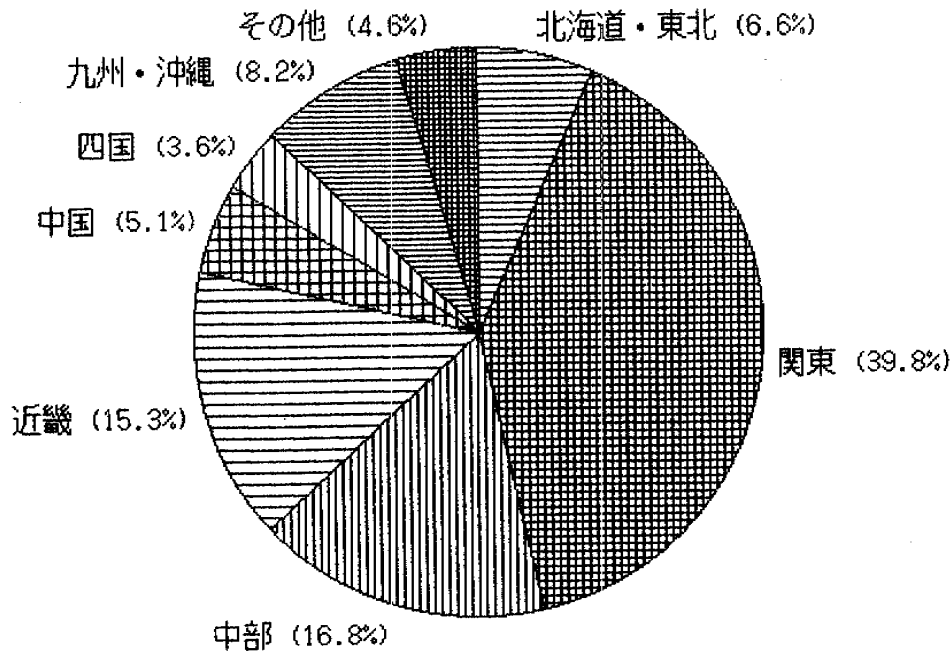


図2. 研修生の地域別割合

地域の分布を見ると、研修が2週間と長いためにやはり東京近辺からの参加者が多いが、重要な文化財を多く所蔵する近畿地方などからの参加者も多い。また新設の文化財施設に関して、われわれに調査依頼の多い都道府県からの研修者数が多い傾向もみられる。調査や指導の際、われわれが担当者にこの研修を受講することを勧めていることもあるが、他館のことであっても保存に関する話を聞く機会が多いほど、研修に参加する必要性を感じるようになるのではないかと思われる。特に地方からの参加者の場合、長期出張のための予算措置が必要なので、館長や会計担当者など事務側の理解が欠かせない。

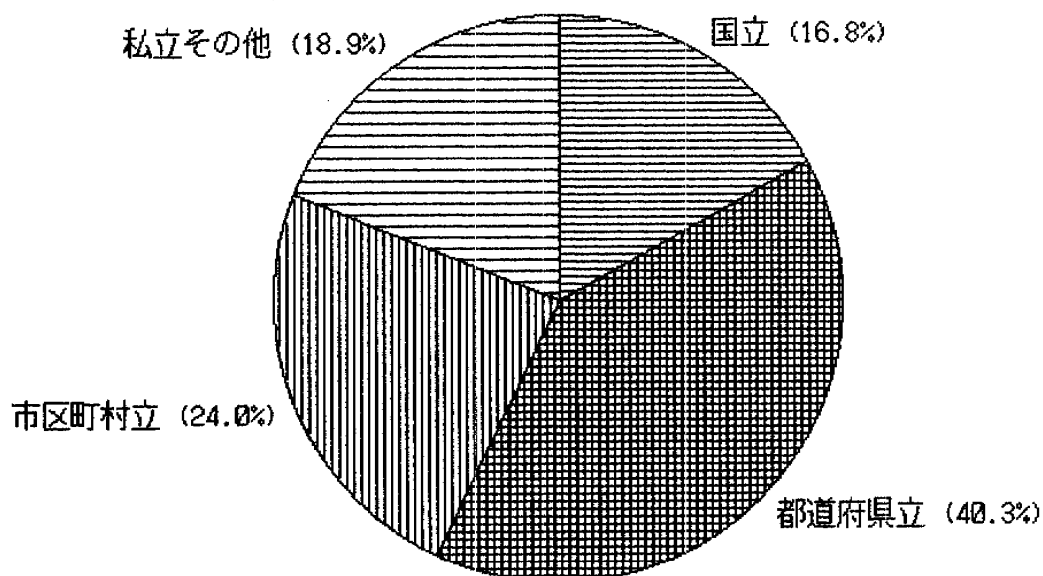


図3. 研修生の所属機関別割合

所属機関別の分布は、研修修了後に研修生一人一人がそれぞれの館や地域で核になって、成果を広めてくれることを期待しているので、都道府県立などの大きな館からの参加者が多い。しかし現在は全国に市区町村立の文化財施設が多く新設されつつあり、そこに勤務する学芸員は大きな館に勤務する学芸員に比べて、保存を考える十分な時間や仲間をもてないことが多い。趣旨にも述べたように、本研修はまさしくそのような立場にある学芸員のために作られたもので、今後は小規模の館に対してもできるだけ期待に応えて行きたいと考えている。

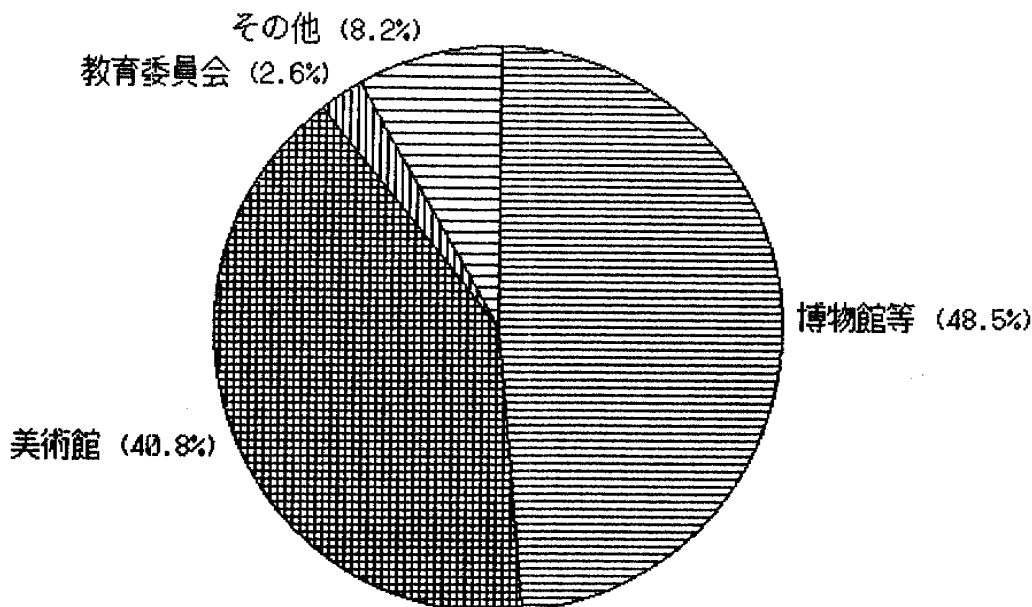


図4. 研修生の館種別割合

研修が発足した頃、保存に関心を持つ美術館が少なかったため、当初の研修参加者はほとんどが博物館関係者であった。しかし近年美術館でも保存に対する関心がたいへん高くなり、最近の研修では博物館と美術館からの参加者数はほぼ半々になっている。これは全国で美術館の新設、増改築が多く行われて、われわれと美術館関係者が接する機会が多くなったこともあるが、全国美術館会議の中に保存に関するワーキンググループが結成されて、それが活発な啓蒙活動を行っていることも無縁ではない。

## 5. 今後の方向

毎回の研修参加者からのアンケートには、現在実施している研修を初級コースとすれば、中級あるいは特定のテーマに絞った専門コースを開催してほしいという意見が多い。昨年9月にカナダのオタワで開催されたIIC（国際保存学会）大会のテーマは、“Preventive Conservation”で、まさしくこの研修の内容に合致するものであった。劣化と保存環境の問題は古い保存科学の課題ではあるが、“Preventive Conservation”という新しい標題の下に、現在世界では広い視点から見直しが始まっている。IIC大会には700名もの参加者があったが、日本からも20余名の参加者があり、保存科学に関する新しい知識を望む人は多い。参加者にとって2週間という期間が適当かどうか、また時期や実施の方法をどうすべきかは今後十分考慮する必要があるだろうが、保存担当学芸員の研修を開始して11年経過した今、掘り下げたテーマでの研修コースやワークショップなどを考える時期が来たのではないかと考えている。

## 6. まとめ

保存担当学芸員研修の11年は、日本の文化財保護への関心が高まってきた時期と重なっている。研究所の関係者は研修を始める前、応募者が定員に満たないのではないかと懸念していた。しかしそのような心配は無用で、少しずつ参加者数を増やしてはいるが、常に定員の2倍から3倍の応募者を受け付ける状態が続いている。これはわれわれ関係者の努力だけではなく、研修を受けた参加者がまたその周囲の仲間へ話を広めた、研修修了者一人一人の啓蒙活動の積み重ねに負っていると思う。

第1回からの研修修了者は「博物館保存科学研究会」という名の同窓会を組織し、毎年1回定期的に会合を持ち講演会や見学会を行い、保存に限らず様々な情報を交換し協力し合っている。同窓会の運営は、幹事の方々の大きな努力に支えられているわけではあるが、この同窓会の活動もまた研修の生みだした成果といえる。われわれとしては、毎回の研修生からの意見と共に、この同窓会のメンバーとも密接な連絡を取りながら、保存担当学芸員研修をより良いものに行きたいと考えている。



## On the Training Course for Museum Conservators in Japan

Sadatoshi MIURA and Chie SANO

A training course for museum conservators is held by TNRICP since 1984. The course are conducted two weeks in July. The number of trainees are about 20. The course is now focused on a museum environment. The program and the distribution of 196 graduates are discussed in this report.